

---

# 幽霊は恋をする

片倉 紗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幽霊は恋をする

### 【著者名】

Z9505C

### 【作者名】

片倉 紗

### 【あらすじ】

わがまま（？）仙女と氣弱な僕（幽霊）のハチャメチャ珍道中。  
お金はないけど時間はある。大切なもののため今、旅に出る。

## 第一節 第一話

守りたいものなんてなかつた。だつて、守られるのが、当たり前だつたから。

守りたいものがあつた。守れると呪つてた。でも、それは、傲慢な幻想でしかなかつた。

\*\*\*\*\*

何度か目をしばたかせてから辺りを見回すと、そこはちょっとと古臭い感じがする、それでいてござつぱりしている床の上だつた。ああ、昨日やつと久しぶりに宿屋に泊まれたんだつけ、とひとりごちてから身を起こすと、飾り窓から朝の光が優しく射し込んでいるのが目に入った。その光を見ると、なんだかわからないけれど、祝福されている気分になる。うん、きっと今日はいい日になるに違いない。と思つたその矢先。

「あら。今頃起きたの？あんた、幽靈のくせに夜に眠るなんて、職務怠慢で訴えられるわよ。」

一人の少女が部屋に入ってきた。どうやら彼女はだいぶ前に目が覚めて朝の散策に出かけていたらしい。服の前をそつと掴んでできた

たわみの中に、瑞々しい、きらきら光る木苺が見て取れた。

「おはよハジヤルコモス。今日はいいお天氣みたいですね。」

氣分のいい朝の田覚めを迎えた僕はちよっぴり浮かれた笑顔で挨拶をした。すると彼女はそんな僕の顔をちらり、と見やつてこう言い放つた。

「はあ？ 確かにお日様は出ではいるけど、それがあたしにひとつ『いい天氣』かどうかなんて、あんたにはわかんないでしょ？ 世間一般に言わてる『晴天』をもつて『いい天氣』なんていうのをあたしに当てはめて考えないでけよつだい。」

前言撤回。

いい日になんてなるわけないんだ。彼女と一緒にいるのに、「いい日」になるわけがないんだもの。

僕との会話を終わらせた彼女はその物言いとはうつて変わって優しい手つきで木苺を円卓に載せていく。ひとつ、ひとつ。丁寧に。それはそれは愛おしそうに、きらきらと黄色く輝く木苺を載せていく。その、優しい微笑を湛えながらも真剣に、 そう、馬鹿みたいに真剣な瞳で木苺を円卓に載せてくる。

「華霄。」

ふと、静かに彼女を呼ぶ声。眼をやると入り口に氣配もなくたたずむ青年がいた。彼女の付き人の伯陽だ。彼もやはり早く起きて散歩に行っていたらしい。朝露の中を歩いたのか、足元がちよっぴり濡れている。

「あひ、伯陽。おはよつ。あなたも散歩に行つてたの？」

伯陽は静かにうなずくと、華霽に近づき手元を見た。彼はあまり話をしない。話したとしても、一言一言だけ静かに言葉をつむべへりいだ。

今田はね、木苺を見つけたの。だから、採つておひやつた。  
おこしそうでしょ？ 彼女が楽しそうに彼に話しかけてくる。笑顔の  
華霽に比べ、ちよつと表情のまじい伯陽はただ黙つて話を聞いてい  
る。彼は表情はまじいが、その眼はいつも優しい。まるでこんこん  
と湧き出る泉のように澄んでいる眼だ、と彼女たちと出会つた当初  
に言つたことがある。その時も伯陽は黙つてわずかに首をかしげ、  
華霽はいたずらっぽい眼で、ふふつと軽やかに笑つていた。今でも  
よく覚えている、その時の華霽の表情。ゆっくりと瞬きをして、そ  
の黒曜石のよつた瞳をきらきらさせながら、僕の眼を見てこいつ言つ  
たんだ。

優しく、とても優しく あなた、私といつしやい 。

\*\*\*\*\*

そのとき、「僕」「僕」は「僕」ではなかつた。「僕」は存在しなかつた。あるのはほんやつとした闇。いや、闇だと、はつきり断言す

ることもできない。だって、その時、「僕」は存在していなかつたのだから。「僕」は存在しなかつたが、それでも存在するものもあつた。それは何か。「僕ではないもの」だ。

「それ」はまだ「僕」ではなかつた。「僕」が「僕」になるにはまだまだ時間が必要だつたのかもしれないし、必要でなかつたのかもしれない。それは「僕」にはわからない。だって「僕」ではなかつたのだから。

「そこ」に時間があつたのか、なかつたかもしれない。空間があつたのか、なかつたのか。それもわからない。ただわかることは「僕」は「僕」ではないものから生まれた、ということだ。

ある日、と言つと語弊がある。先ほども述べたように「そこ」には時間があつたかもしれないし、なかつたかもしれないから。ただ「僕ではないもの」に変化が起つた。それは目に見える変化であつたかもしれないし、そうではなかつたかもしれない。ただ、「変化」があつた。「僕」が「僕の存在」というものを認識したのだ。そして認識したことによつて世界が、　少なくとも「僕」の世界が変わつた。「僕」が変化を望んでいたのか、望んでいなかつたかなんてのは関係なく、世界は変わつてしまつた。

「僕ではないもの」が変化を生み、そして「僕」を生んだ。が、それはまだ「僕」になつていなかつた。「僕」が「僕」を完全に「僕」と認識するまでにはまだ足りない「何か」があつたからだ。ただ、それでも何故「僕」が「ああ、生まれた」と認識したかと言う

と、風を、光を、感じたからだ。それらは少なくとも今までいた「そこ」にはないものだつた。それらを感じとき、なんと表現すればよいのか初めはわからなかつたが、後々考へるとやはり「生まれた」と言う表現がぴつたりくるのではないかと思うので、今でもこの表現を使つてはいるのだがもしかしたら適切ではないかも知れない。

まあ、大体、自分が生を授かつた瞬間のことを覚えてる人なんていらないだろうから、まだぼんやり記憶がある分僕のほうが優秀だろう、と思うのはうぬぼれだろうか。

じつして「未完全の僕」は毎日風を感じ、光を感じ、そして闇を感じた。いつたいどの位の時間がたつたのかなんて、僕にはわからない。ただ、風を感じ、光を感じ、闇を感じていたからだ。そうしていることが「未完全な僕」には「完全」に思えたし、これ以上の変化はないと思っていた。そして、僕は忘れていた。「変化」はひたひたと音を隠して近づいてきて、あつという間に僕を飲み込んでいくものだったと言つことを。

一番目の「変化」。それは「僕」を「僕」と認識させる、大きな「変化」となつた。「未完全な僕」に突然近づいて来た「それ」に対し「未完全な僕」は、初め認識ができなかつた。だつて、「それ」は初めて見たものだつたからだ。だから、なんと認識してよいのかわからなかつた。ただ、それは「光」に似ていた。なので初めは「光」なのだと思つた。が、「それ」は「未完全の僕」が知つてゐる「光」と少し違つた。では、「光」でないのであればそれは何なのかもちろん、今の僕は知つてはいるけれど、「未完全な僕」は一生懸命考へた。それまで僕は毎日風を感じ、光を感じ、闇を感じていた。けれど、これらのものがなんと呼ばれているか知らなかつた。だから知りたくなつたのだ。「『風』はなんと呼ばれている

ものなのか。』「『光』はなんとよばれているものなのか。」など。  
つまり　　僕は知らなかつたのだ。『言葉』と言つものを。

『道生一・一生二・一生三・三生萬物。萬物負陰而抱陽。  
沖氣以為和。』

\* \* \* \* \*

その日、結局宿を出たのは、街がすっかり日を覚ましたきつた後で。僕はぶつぶつと文句を言つ華霄に黙つてついていくしかなかつたわけなんだけれども。ガヤガヤといろんな人の声が交じり合つてる市場やら、呼び込みの声が激しい食堂街を通ると、華霄のぶつぶつも少しずつ小さくなつていき、そのうち「あ」とか「ん?」とか、感嘆がもれ始める。じうじうところは普通の女の子に見える。いや、女の子であることは間違ひではないから、「見える」つてのは失礼かもしねり。

「…春、仲春！聞いてるの？」  
「え？」

「…聞いてなかつたでしょ…。もう、失礼しちゃうわ！あたしがはなしかけてあげてるつてのに…」

「ふつ、と顔を膨らませる様子まるで幼子のようだ。しかし、その表情も長くは続かない。すぐに新しいものに目をやつては興味深そうに瞳をきらきらさせるのだから。

「あのね、今日はじこまで行こうかって話をしてたの。もう一日この街にいてもいいし、別の街に移動してもいいかなって思つてんだけど。伯陽は次の街に行くまでかなり距離があるから明日にしてもいいんじゃないかって。仲春はどうしたい?」

案の定、機嫌を直したらしい華霄が屋台を覗きながら話しかけてくる。見ているのは翠の石がついている髪飾り。きっと、挿したら似合うだろ? 黙つて笑つてさえいれば、の話だけ。そんな不埒なことを頭の片隅で考えながら、もう一方で近隣の街のことを考える。

「別の街ですか・・・。次の街、と言つて岱裕が近いって言つてたな・・・。でも、岱裕に行くとなると、この時間ではちょっと遅すぎるかもしませんね。」

岱裕はこの近隣にある城壁に囲まれた立派な街で、東のほうでは五本の指に入るくらいの商都として栄えてるらしい。なんでもその昔、都が置かれたこともあつたと言つことなのだけれど、僕自身はよく知らない。行つたことないし、この話だつて、昨日の宿屋の宿泊客から教えてもらつた情報だ。

「へえ、岱裕を知つてゐるなんてね。仲春、何時からそんなに物知りになつたの?」

簪に向けていた瞳を僕のようになす。僕はその、華霄が持つてゐる簪の、翠の石の可憐に揺れるさまに一瞬、目を奪われた。

「昨日、宿屋で一緒に食事をした人がいたでしょ？？あの人人が言つていたんですよ。」

視線を簪に、いや正確には翠の石に向けながら、話す。 どうも、目が離せない。

「ああ、あの人人の良さそげなおじさんね。確か商人だつて言つてたけど。あの性格じゃ、もうからないんぢやないかしら・・・？いい人そなんだけね。 で。・・・・ 気に入ったのね？」

華霄が聞いてくる声が聞こえた。 気に入った？何を？おじさんを？ それとも 。

突然、手が伸びてくる。意識が簪からそれる。と、こわい笑顔の華霄の顔が見えた。

「人に話しかけるとき、話を聞くときは目を見なさいっていつてあるでしょ！？ぼやぼやせずにお財布を出して頂戴。」

「買うんですか？」

「あ・ん・た・が！？気に入つたんでしょう？だから買うのよ。」

「買つてくれるんですか？」

「まさか。ツケよ、ツケ。しっかり働きなさいよ、グータラ幽靈。」

そう言いながら、財布を出して、かんざし屋に御代を支払うべく話しかける。

暫くして。帰り際にひきつった笑顔で僕らを、正しくは値切りに值切つた可憐な少女を見送った店主を見て、僕は思った。 絶対華宵のほうが昨日のおじさんより商人に向いてるだろつた、と。

「はい、これね。あたしが挿してあげようか?」

しばらく道を歩き、簪屋が見えなくなつた頃に華宵がさう言って僕に簪を差し出した。しばらく、簪をみつめて考える。

「あの。別に僕は自分に挿したくて見てたわけじゃないんですけど。」

「え? じゃあ、この簪どうするのよー?」

きょとん、とした彼女の顔はこの文物の簪を挿すのは僕なのだ、と本気で思つてたことを物語ついて。僕はなんか、微妙な気分になる。

「僕が、こんな文物を挿せるわけがないじゃないですか。」

「だつて、気に入ったんでしょう。だからわざわざ簪屋が見えなくなるまで渡すのをひかえてたんじゃない!ーー氣を使ってあげたのに!」

いやいや、氣を使うところがずれています。明らかに。

「だけど、とにかく!僕は挿しません。綺麗だなつておもつたけど、自分で挿したいわけではありませんから。大体、文物の簪挿してると男なんて変に目立つし、華宵はそんな人間と一緒に歩きたいですか

？厭でしょ？だから、僕は挿しません。」

一気におくし立てる、華霄がむつとした顔で聞き返していく。

「じゃあ、これどうするのよ..」

「女物なんだし華霄が挿したらいいじゃないですか。似合つと思いまますよ。」

「これを私に挿せつて言うの？」

「ええ、そうです。僕が挿すよりも、絶対似合つと思いますよ。」

絶対、の部分に力を込めて言つたからなのか、華霄はふむ、と一つ頷いておもむろに簪を挿してこいつ言つた。

「じゃあ、これは仲春からの贈り物つてことで貰つてあげるわ。でも、御代は仲春もちなんだから、ツケはツケよ。しつかり払つてもらひますから、そのつもりでいなさいよ。」

可憐な翠の石を揺らめかせてきつぱり言い放つた彼女を見て僕は確信した。 やつぱり、昨日のおじさんより華霄のほうが商人に向いている。



## 第一話 第一節

さて、簪を貰つてしまつたが為にちょっとぴり懐具合が寂しくなつた我らが華靄隊。（なんて。そんな言い方をしたら絶対に華靄に怒られるけど。）「なんどきにどうするかと言つと

「初にお田にかかります。私は白圭洞は延狼君に乙返しております華靄と申します。よろしくお見知りおきを。」

そう、大切なのは挨拶、そして人脈を広げることである。で、現在さらさらと言いなれた文句で挨拶をしているのが我ら華靄隊の隊長、華靄その人。この人、本当に愛想笑いが似合つんだ。で、誰に挨拶をしているかと言うとこの街にある廟の主にである。だいたい、何処の街にもたくさんの廟があるが、やはりその中心的存在となるのが土地神様のいる廟だ。土地神様はその土地に縁のある人（稀に人でないこともあるけど）がなることが多いので情報をたくさんもつてているし、何しろ顔が利くので、ここ最近、付近の街で困っている人はいないか、一体どんな悩みなのかを聞きに来ているのだ。

「ああ、そうかしこばらなくてよいよ。私はこの辺りの土地爺を任せられている宋節という。まあ、生前の名など何の意味も持たないがね。」

目の前に立っているのは初老の男性だ。神様に年齢は関係ないのだから初老という言葉は正しくないのかもしだれど。黒髪の中混ざる白髪は少なくない。田元の皺は笑顔になると一層濃くなる。だから、やはり初老と言う言葉がぴったりだ。その彼に華靄は

ひとり通りの挨拶の言葉を述べ、突然尋ねた無礼を詫び、少しの世間話をした後に本題に移つた。

「 では、岱祐の街に？」

「ああ、何でもあちらの爺様も困つてゐるらしい。あまり大仰に頼みに来るのでそろそろ何とかしてやらねばならんと思いつつも、そこの主の評判はあまりよくないのでな…。困つとるらしい。」

少し困つた顔をして紡がれた言葉は、その実かなり困つてゐることをおわせている。

「評判が悪いとは？」

華宵もつられて困つた顔をして聞いている。やはり、助ける人の人間性というのも大切だ。悪人だからと言つて絶対に助けないわけにもいかないし、善人だから何時でも助ける、というものでもないらしい。

「いや、そんなに酷い人でもないんだがね。何でも高利貸しで一代の財を築いたとかで…。まあ、少しばかり業高く張りだ、という程度かの。しかし、相談事はそこの主自身のことではなく主の娘のことらしい…。高利貸しで人には酷いことをしておつてもやはり自分の娘はかわいいらしい。娘自身は評判の良い子なんだがね…。」

ふう、と溜息をつきながら話す土地神様は先ほどよりも一層困つた、と言つた顔をしている。

評判のあまりよろしくない高利貸しに、親とは似ても似つかぬ評判の良い娘 。まるで物語のような話だが、まあ、物語なん

てものは大体見たり聞いたりしたことがモトになつてることが多いのだから仕方ないのかもしない。しかし、それだけだつたら別に土地神様も困ることはないんじやないか？娘を助ければ親も改心するかもしれないし、むしろこれは改心させる絶好の機会になるんじやないか…？

そんな風に自分で勝手にいろいろ考えていた僕の耳に届いた言葉は、その場にいた全員を固まらせるに十分だった。

「しかしどうやら娘はな、幽霊に惚れとるひといんじやよ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9505c/>

---

幽霊は恋をする

2010年10月20日19時31分発行